

聖橋の嘆き

野口津義夫

一風変わった男女のロマンス

自分の行く末に不安を覚えた中年の女スリが、たまたま深夜通った人気のない通りで運命鑑定をしてもらったところ、手相を見終えた占い師が、あなたは来月死にますと女に言った。(本文抜粋)

聖橋の嘆き

はじめに

人間は他の動物や植物に比べて個体差が大きい、とよく言われる。そして、それを知的動物の所以だと言えば話は簡単だ。しかし、私は、このことを依然、言い張っていいものかどうか疑問を懐く時がある。第一、人間だけの観点に立つて一方的に人間は優れていると主張するのは、他の動物物に対して失礼ではないか。

というのは、「人間は他の動物や植物に比べて個体差が大きい生物である」と、最初から定義してしまえば何の事はない。こう述べた瞬間、人間の自慢の元凶である個体差（個人差）、つまり、精神的には、自由なる自己表現である個性とかユニークさとか獨創性などが当たり前になってしまい、忽ち、その威力が消滅してしまうからだ。また、身体的にも、ずば抜けてスポーツに向いている体格をしていたり、極めてスタイルのよい人がいたりしても、果たして、それが人類という類を逸脱するほどの差であるのかと展望してみた場合、大した差ではないことが分かるからだ。こうした全体と個の問題は、哲学や生物学だけでなく全ての学問において、どうしても避けられない大事な問題である。個人の自由を大幅に認めれば、社会の秩序が乱れて收拾がつかなくなる。そこで、それを避けるために、法律や規則で統制して全体の秩序を保とうとすると、個人の自由が大幅に後退する、というのが法学の例であった。それは文学といえども例外ではない。

だが、ご承知のように、文学には味がないといけない。なぜなら、学問上の杓子定規な定義だけでは、せつかくの私の小説が味わいのある物語として展開しないからだ。よって、私は、物語

をクリエイティブにするために、上述の定義を自分なりに再定義せざるを得ない。

この物語は、外見的には、かつてない奇怪な脈路を辿って恋愛を成就した、一風変わった男女のロマンスである。そして、私は今こそ、この秘話に粋（いき）な定義を与えることができた。

「人間は他の動物や植物に比べて、精神的に不安定なときに、その程度に比例して実に奇怪な行動をとる生物である」

では、ご期待ください。

序

滝本泰子は、平成三年の元旦を何の感動もなく迎えた。昔はよかったと溜め息をつけば、尚古趣味的だと笑われそうだが、湾岸戦争やバルト諸国の危機が連日のようにテレビの画面を賑わしている昨今を鑑みれば、果たして今がよいのか、それとも昔がよかったのかは即断できまいと、彼女は諦観に似た理屈っぽさで意地を張った。

正月も呆気なく過ぎ去ろうとしていた、ある日のことであった。ふとA新聞の「カセットテープで漢詩を詠む」という広告を目にした泰子は、今でも、ありありと甦る二十年前の一場面に容赦なく浸った。

高校時代、初めは小声でゆっくりと歌い始め、次第に気分が高揚し、感極まって、しとどに涙を流しながら惜別の詩を詠じた漢文の先生がいた。歌い終えた後、先生は涙を拭きながら確か次のように言った。

「諸君、中国は広大な国です。川一つにしても、我々の持っている川のイメージでは到底解釈できないほどの規模なのです。また旅立つにしても、それは計り知れないほどの距離なのです。つまり自然の規模が大きいということは、それだけ人間の別れの深刻さ、悲しみの度合いも絶大なものであったと考えられます」

それは花霞に煙る晩春の三月に、揚子江の辺から遙か東方の揚州へと舟で旅立って行った友人を、李白が黄鶴楼の上で見送った歌であった。

流れの上に、ぽつんと浮かぶ一艘の舟。その帆影が次第に小さく遠ざかって行き、やがて青空の彼方に、すうっと消えてしまう。後にはただ、広々とした揚子江が遙か天に接して流れているばかりである。

友を乗せた帆掛け舟が空の彼方に見えなくなるまで、いつまでも、いつまでも楼に佇む李白。その残された者の、やるせない孤独、取り留めのない別離の空白が切々と伝わってくる歌であった。

泰子は口ずさんだ。

「故人西のかた黄鶴楼を辞し、煙花三月揚州に下る。弧帆の遠影碧空に尽き、唯見る長江の天際
に流るるを」

そして思った。

『私だって悲しいわ』

数日して、泰子は松戸の伊勢丹に現れた。彼女の住んでいる所から歩いて、そう遠くない。小さい頃から文章の書くことの好きだった彼女は、なぜか、このデパートに来ると、ほっとした。特に西側のロビーは妙に落ち着く。十階の本屋に漢詩のカセットテープを買いに来て、高いので買うのをやめた彼女は、この日もここに来た。

各フロアは大勢の人で、ごった返しているのに、一度このエリアに入ると全くと言っていいほど人の気配がなく、実に不思議な空間を形成していた。どこへ行っても人また人の、新宿辺りの

デパートとは違って、広い、がらんとしたロビーに静かに流れる音楽だけが、ゴーストタウンではないという幻想的な証拠を与えていた。だから、十一階から一階まで各階のロビーで適当に過ごしながら下りて来れば、一編の小説、いや十一編の物語ができるのではないかと、泰子は笑みを浮かべた。

彼女は早速ペンを執った。

（都会の雑踏。溢れるばかりの人がいるのに、なぜか逆に孤独を感じる忙しい街角。たとえ何人いたとしても、ただ私の視界に入っては消えて行く人達は、電気屋の看板や横断歩道の信号のように、単なる風景にしか見えなかった。）

ある日、私は偶然、そんな寂しさと白々しさが漂う都会の中に、妙に落ち着く不思議なエリアを発見した。都会の喧騒に疲れた時、ふらりと喫茶店に入ってコーヒーでも飲んで気を紛らす人もいるだろう。しかし、周囲で喋りまくる人、蔓延するタバコの煙、ボリュウムいっぱい音楽、それらを考えると、私はそんな所に到底入る気がしない。でも、もう大丈夫。ある日、私は偶然、格好の憩いのエリアを発見したから――

「まずまずの出だしね」

あまりお金の入っていない財布をバッグから取り出して、泰子は呟いた。

喉の渴きを覚えた泰子は九階に下り、その階の「憩いのエリア」の自動販売機でジュースを買った。そして喉の渴きと同時に心の渴きを癒し、時に身を任せた。

明る過ぎないロビーの照明が彼女を優しく包み込み、ファンタジーの世界へと誘った。

『きっと私の書こうとしているのはメルヘンだわ!』

その時、夢のようなアナウンスが流れ、秘密の通路が呼応し、各階の「憩いのエリア」に響き渡った。

「皆さん、もうお申し込みになりましたか。伊勢丹のＩカード…」

年を取るといふことは、ある意味では純粹さの欠落だと言える。したがって、何にしろ、若い時のように情熱が湧かない。泰子は、それを重々承知していたが、このエリアに来ると事情が違った。不思議に幻想が湧いて、渴きも癒える。こんなわけで、彼女は暫く、この習慣の虜になった。

泰子は、松戸駅から歩いて十三分の２DKのマンションに一人で住んでいる。低迷を続ける株式相場に嫌気がさし、去年の十二月に、ボーナスを貰って都内の証券会社を退職した。現在、三十六歳だが、色白で痩せ型の彼女は今でも綺麗だった。だから言い寄る男は多かったが、どういうわけか皆年下で、その都度、彼女の決断を鈍らせた。例えば、二十八の時に十九の学生に、三十の時に二十三の同僚に、そして三十五の時に二十七の通行人に、といった具合で、百六十三センチの彼女は、いつも嬉しいような、困ったような溜め息を漏らすのが常だった。

『参ったわね。どうなってるのかしら…』

とにかく、現在無職の彼女は、当分一人で細々と暮らしていかなければならないと思った。

二月に入っても、相変わらず株式相場の低迷は続いた。泰子は例によって「憩いのエリア」に

足を運んだが、その途中、野村證券などの証券会社の看板が目に入った時、否応なしに去年の職場での記憶が甦った。

八月の初めに、今が底だからと言って関西電力の株を三〇九〇円で五百株買った顧客がいた。ところが、その直後、イラクのクウェート侵攻という全く予期しない出来事が起こった。おかげで二箇月後には二〇〇〇円割れしたが、今、二九五〇円まで戻っている。

『あの人、戻り売りましたかしら？』

この日、泰子は六階の「憩いのエリア」の自動販売機に、340ccのウーロン茶があることを発見した。現在失業中の彼女は、仕事を辞めてから自分が随分ケチになってきたと感じ、苦笑した。

『でも250ccのウーロン茶なんて、少なくて飲めないわ』

ウーロン茶を飲みながら、泰子は、いつものように時に身を任せた。何といっても、自由であることが堪らなく嬉しかった。

三年前の夏、年下の少年に誘われて浦賀に行った時のことが思い出された。京浜急行で浦賀まで。そして、そこから西叶神社まで頑張って歩いた。バスで三分というのは、こんなにも遠いのかと、その時、泰子は思った。

「静夫君、灯籠の前に立って。撮ってあげるわ」

泰子はポケットカメラを取り出して、少年に向けて言った。

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。